

英語前置詞overの従事用法のフレーム意味論的考察

石垣, 恵一
九州大学大学院 : 修士課程

<https://doi.org/10.15017/4377726>

出版情報 : 九大英文学. 61, pp.51-67, 2019-03-31. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

英語前置詞 *over* の従事用法のフレーム意味論的考察*¹

石垣 恵一

1. はじめに

本論文では、英語前置詞 *over* の一用法である従事用法に関して、フレーム意味論と認知言語学の観点から考察を行う。まず本論文で扱う従事用法とは以下の(1)に示すような「～しながら…」の意味で捉えられる *over* の用法を指す。

- (1) We talked *over* lunch. (Brugman 1988: 19)

英語前置詞 *over* の研究は前置詞の多義性に関する研究として認知言語学の先駆けとなった研究と言われており、これまでに多くの研究者によって様々な観点からの研究が成されてきた (Brugman 1988、Lakoff 1987、Dewell 1994、Tyler and Evans 2001, 2003 など)。しかし本論文で扱う従事用法に関しては不思議なほどにその研究が成されていない。

本研究ではまず従事用法の特徴を見る。その後従事用法に関するほぼ唯一の先行研究である Brugman (1988)と Quirk et al. (1985)を概観し、その問題点を指摘する。そしてフレーム意味論の観点から、従事用法の容認性には「くつろぎのフレーム*²」が関係しており、そのくつろぎのフレームには動詞の「コミュニケーションフレーム」と *over* の目的語に飲食・嗜好品を表す名詞が含まれていることを示す。さらに以下の Figure 1 の斜線部で示しているように、その二つが話し手や聞き手の文化や習慣の中で合致することにより、その表現が従事用法として容認されることを主張する。そして従事用法の成立には動詞の「コミュニケーションフレーム」が必要であるという観点から、

従事用法の表現では典型的には「言葉」が、周辺事例としては「情報」や「視線」などがトラジェクター（第一焦点参与体）として移動することを確認する。

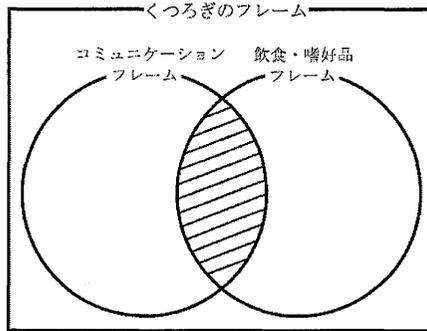


Figure 1

2. 従事用法の特徴

本論文では従事用法を、(1) で表現されているような二つの行為（「話をすること」と「昼食を食べること」）が同時に行われていると解釈できる表現として定義する。すなわち従事用法とは次の (2) にある‘over a period of weeks’のような典型的な時間用法とは異なる用法として捉えられる。

(2) He spent his money over a period of weeks. (Brugman 1988: 19)

(1) のような表現は、特別な文脈を与えなくても従事用法として解釈が得られることから、従事用法のプロトタイプとして捉えられる。

以下の (3) と (4) の違いを見ると、従事用法を考察するにあたって直面する問題点が浮き彫りとなってくる。

(3) We talked over (a cup of) coffee.*³

(4) ?We talked over (a glass of) water.

(3) と (4) は並行的な統語構造を持ち、over の目的語はいずれも「飲料」を意味する名詞であるが、(3) は特別な文脈が無くとも容認可能であるのに対し、(4) はそのままでは従事用法としての容認性は極めて低い。つまりなぜ「コーヒーを飲みながら」は問題なく従事用法として容認され、「水を飲みながら」は従事用法として容認されない（もしくは容認されにくい）のかといった容認性の問題が生じている。すなわち、本論文での論点は、over の文法性ではなく、従事用法としての文の容認性である。

3. 先行研究

3. 1. Brugman (1988)

Brugman (1988) は over の多義性に関する先駆的な認知意味論的研究であるが、本論文で言う従事用法については以下のように述べている。

- (5) J. R. Ross has pointed out to me that sentences like (5)(下の例文(6) :
筆者注) are restricted in that the trajector (which does not show up
explicitly in sentences (5)) can only be objects of the sort described in
Reddy(1979): that is, they can only be objects of communication.
(Brugman 1988: 19-20)

Brugman はこの用法を「抽象的用法」(abstract use) と呼び、以下の例を挙げてその容認性を論じている。

- (6) We talked over lunch. (=前掲(1))
(7) He spent his money over a period of weeks. (=前掲(2))

(6) では over 句に名詞句'lunch'が取られているのに対し、(7) では over 句に名詞句'a period of weeks'が取られている。本論文ではこの (6) の表現を従事用法とする。(5) にあるように、(1) のような表現でのトラジェクターは「コミュニケーションの対象」でなくてはならないと Brugman (1988) は述べてい

る。ここでの「コミュニケーションの対象」とは、Reddy (1993) の言う‘conduit metaphor’の‘message’にあたる。従事用法として解釈できる (1) では動詞に伝達動詞が用いられており、‘message’の移動があることが分かる。しかしながら、上記の (3) と (4) で示したように、同じ伝達動詞が用いられていても、over の目的語に取る名詞によっては容認されないケースもある。Brugman (1988) はイメージスキーマを用いて英語前置詞 over についての考察を行った最初の研究ではあるが、彼女の説明だけでは捉えられない例があることから、従事用法についての考察は十分に成されていないと思われる。

3. 2. Quirk et al. (1985)

Quirk et al. (1985) では、前置詞 over の意義を 8 つに分類している。その中に本論文で言及している従事用法として捉えられる用法として (8) をあげている。

(8) We discussed it over a glass of wine. (Quirk et al. 1985: 685)

Quirk et al. はこの用法を「付帯状況を表す」(ACCOMPANYING CIRCUMSTANCES) と命名している。しかしながら残念なことに、この用法に関する詳しい記述は全くされていない。それでもなお、Brugman (1988) での記述といくつかの類似点が見られる。第一に、動詞に talk と同じ伝達系の動詞である discuss が用いられている。第二に、over の目的語に‘lunch’と同じ飲食物を表す‘wine’が用いられている。第三に、over 句は「飲みながら」のように「～しながら…」の意味で解釈することができる。

このように over の従事用法に関する数少ない先行研究である Brugman (1988) と Quirk et al. (1985) にはいくつかの類似点が見られるが、提示されている例の少なさから十分な考察が行われているとは言えず、上記で示した (3) と (4) の容認性判断の問題点を解決することもできない。

4. 理論的枠組み

本節では以下の論考で用いる諸概念について概観する。

4. 1. フレーム

上記で示した (3) と (4) の容認性の違いから分かるように、従事用法を考察するにあたって直面する問題点はその文法性ではなく意味の容認性にある。そのため本論文ではフレームという概念を中核とした意味分析手段であるフレーム意味論を援用して、従事用法の容認性の問題点の解決を試みる。フレーム意味論を提唱した Charles Fillmore はフレームを次のように定義している。

- (9) What holds such word groups is the fact of their being motivated by, founded on, and co-structured with, specific unified frameworks of knowledge, or coherent schematizations of experience, for which the general word frame can be used. (Fillmore 1985: 223)

すなわち、フレームとは語の意味を規定する背景となる図式化された場面であり、それは特定の文化の中で、人々の日常生活を通じて形成された経験的知識である (大堀 2005: 1-2)。

4. 1. 1. 名詞のフレーム – *land* と *ground*

本論文での従事用法のフレーム考察の際に、*over* 句の目的語のフレームに関して言及するため、ここでは名詞のフレームについて概観する。

- (10) a bird that spends its life on the land (Fillmore 1982: 121)
(11) a bird that spends its life on the ground (ibid: 121)

land と *ground* は一見するとどちらも同じ「地面」を表しているように思われるが、その意味の背景にある状況が異なっている。*land* は *sea* と比較した時の乾いた地面を表しているのに対し、*ground* は *air* と比較した時の乾いた地面を表している (Fillmore 1982: 121)。すなわち、(10) での 'a bird' は「海の上では過ごさない鳥」という意味を含み、(11) での 'a bird' は「飛ばない鳥」と

いう意味を含むことになる。

4. 1. 2. 動詞のフレーム - 商取引のフレーム

本論文での従事用法の考察では、動詞のフレームも考慮に入れるため、前節と同様に本節では動詞のフレームについて概観する。

例えば動詞の buy, sell, pay の意味を適切に記述するためには、その背景にある「商取引」のフレームに言及することが必須であり、BUYER、SELLER、GOODS、MONEY などがフレーム要素として喚起されることになる*4。

4. 2. プロトタイプ理論

意味の拡張関係を考察する際に、その語の中心的な意味と周辺事例としての意味との関係が重要となってくる。そのため本節ではプロトタイプ理論を概観する。

(12) ... natural prototype stimuli tended to be more rapidly learned and more often chosen as the most typical example of the category than were other stimuli. (Rosch 1973: 1)

(13) Categories have members. Some members are better instances of a category than others, the best instance being the prototype.

(Radden and Dirven 2007: 17)

このようにプロトタイプとは、カテゴリーの最も典型的な成員のことを言う。

例えば「鳥」を連想する場合、一体何が思い浮かぶであろうか。Rosch (1975) によると、1975 年にアメリカの大学生を被験者として行った、鳥の典型性に関する調査では、コマドリ、スズメなどはプロトタイプに位置づけられ、一方ペンギンなどは周辺事例として位置づけられた (Rosch 1975: 201)。このように、くちばしや羽があり、空を飛べる鳥はプロトタイプになりやすいと考えられるが、ダチョウやペンギンのような空を飛べない鳥は周辺事例として想起される。

4. 3. アフォーダンス

コミュニケーションフレームは典型的には発話系の動詞が持っているが、発話系以外の動詞が「従事用法」に使われる例を考察するために、ここではアフォーダンスの概念を概観する。

- (14) The affordances of the environment are what it offers the animal, what it provides or furnishes, either for good or ill. (Gibson 1979: 127)
- (15) ある物事のアフォーダンスとは、その物事がある環境の中でそれぞれの知覚者に対して持つ意味である。より具体的には、環境の中のものが知覚者に提供する行為の可能性である。(本多 2005: 56)

例えば、硬くて鋭い刃をもつ握ることのできる対象は切ることやばらばらにすることをアフォードする(ナイフや手斧、肉切り包丁)(Gibson 1979: 40(古崎(共訳)))。本論文ではのちにこの概念を「行為」に拡張し、フレームの考察に援用する。

5. フレームによる従事用法の容認性分析

5. 1. コミュニケーションフレームと飲食・嗜好品フレーム

第1章で既に述べたが、従事用法の容認性を判断するためには、動詞には「コミュニケーションフレーム」、overの目的語には飲食・嗜好品を表す名詞句が必要であり、さらにそれら二つのフレームが話し手や聞き手の文化や習慣の中で合致することにより、その表現が従事用法として容認される。そのため本節ではそのフレームを定義づける。

- (16) コミュニケーションフレーム
従事用法で用いられる動詞の背景化された情報を指す。典型的には「言葉」が、周辺事例としては「情報」や「視線」などがトラジェクターとして移動することによりコミュニケーションを連想させるフレームである。そのためコミュニケーションフレームを持つ動詞の参与者には、SPEAKER、LISTENER、MESSAGE、

INFORMATION、GAZE などが含まれる。

(17) 飲食・嗜好品フレーム

over の目的語の背景化された情報を指して、従事用法では over の目的語には飲食物や嗜好品を表す名詞句が用いられなければならない。

5. 2. 従事用法のプロトタイプ的な例

ここからは具体例を提示して従事用法の容認性を確認していく。

(18) We talked over a cup of coffee.

(19) *We played baseball over a cup of coffee.

(18) では、‘over a cup of coffee’の部分は「コーヒーを飲みながら」という従事用法としての意味で解釈できる。動詞には「コミュニケーションフレーム」を持つ伝達動詞の‘talk’が用いられている。英語文化圏では、話をする行為をコーヒーを飲みながら行うことは非常に一般的なことなので、そのような内容を表す文が自然なものとして容認される。

それに対し (19) は容認されない例である。ここでの興味深い点は、(18) と (19) の over 句はどちらも従事用法として容認されるために必須である飲食・嗜好品を表す名詞句を持っているのにもかかわらず、なぜ (19) は容認されないのかということである。(19) での over 句の部分は (18) と同一であり、特別な文脈が加えられているわけでもないため、over 句の目的語は飲食・嗜好品としての意味を表すと考えられる。一方、動詞句‘play baseball’が表す「野球をする」という行為が「コミュニケーションフレーム」を想起することは難しいため、(19) は従事用法として容認することができないと考えられる。

次に over 句を見ていく。over 句には飲食・嗜好品を表す名詞が現れるが、実際の用例を調べてみると食事に関連する名詞が多く現れることが特徴的である。

(20) “That was a lie, Harry,” said Hermione sharply over breakfast, when he

- told her and Ron what he had done. (J. K. Rowling 2000: 254)
- (21) “You mustn’t blame yourself for the way the boy’s turned out, Vernon,”
she said over lunch on the third day. (ibid 1999: 27)
- (22) To cap it all, Luna told him over dinner that no copy of The Quibbler
had ever sold out faster. (ibid 2003: 744)

(20) では *breakfast* と「コミュニケーションフレーム」を持つ発話動詞 *say* が用いられており、朝食を食べながら話をすることは、英語文化において極めて一般的な行為であるので従事用法として容認される。同様に (21) では、昼食 (*lunch*) を食べながら会話をする (*say*) ことは十分想定できる行為であり、従事用法として容認される。さらに (22) でも夕食 (*dinner*) を食べながら話をするとはごく一般的であるため、従事用法として容認される。

食事に関する名詞と同様に、従事用法の *over* 句には飲料を表す名詞も多く現れる。

- (23) Over coffee, the two discussed their shared frustration ... (COCA)
- (24) " We are in the middle, " he told me over tea in his shady garden... .
(COCA)
- (25) The two foolish old cronies are, over their wine, talking of the beauty
of the women on the Ionian coast; you hear the church-bell in the
distance. (J. Henry 1904: 134)

(23) の動詞‘*discuss*’は主語である *the two* が議論をし言葉を交わすことを表すので「コミュニケーションフレーム」を持っている。コーヒーを飲みながら話をしたり議論をしたりをすることは想起可能であり一般的に習慣化されている行為であるため (23) は従事用法として容認される。

(24) の動詞‘*tell*’は主語である ‘*he*’ が言葉を伝えることを表し「コミュニケーションフレーム」を持っている。紅茶を飲みながら話をするとは想起可能であり一般的に習慣化されている行為であるので従事用法として容認され

(27) と (28) を見てわかるように、従事用法を含む節の動詞にはどちらも‘sit’が用いられている。‘sit’は非伝達動詞であるため、内在的に「コミュニケーションフレーム」を持っているとは考えづらい。ここでは 4.3.節で導入した「アフォードダンス」という概念を援用する。「座る」という行為は、ただ「座る」ことが目的ではなく、座って他の行為を行うことがその目的であることがある。すなわち「座る」という行為には他の様々な行為を行う可能性が秘められている。例えば野球をする際、我々は野球をすることに専念するであろう。しかし「座る」という行為を行う際は、座ること自体を目的とするのではなく、話をしたり、コーヒーを飲んだり、手紙を書いたり、本を読むために座ることがあるだろう。すなわち「座る」という行為は他の行為を行うために座ることがあると解釈ができるため、動詞‘sit’には同時に行うことができるほかの行為のフレームと結びつく可能性がある。

(27) と (28) にあるように、「座っている」という姿勢や状態がアフォードするものの中には、「リラックスした状態で飲食を楽しむ」といった行為が含まれると経験的に想起できる。そうした「リラックスして飲食を楽しむ」といった状況には「会話」などのコミュニケーション活動が想起できるため、「コミュニケーションフレーム」との結びつきがあると判断できる。

(29) ?We sat over a cup of coffee.

(30) ?We sat over a glass of whisky and soda.

(29) と (30) はそれぞれ (27) と (28) から従事用法節以外の節を取り除いた文である。(27) と (28) は従事用法として容認可能であったのに対し、(29) と (30) のように文脈が無くなると、それらは従事用法としての容認度が少なくとも下がる。ここから分かるように、動詞‘sit’が「リラックスした状態で飲食を楽しむ」といった行為をアフォードするが、それはそのような解釈を可能にする文脈に支えられていることが分かる。例えば (27) では同時に会話が行われているため、リラックスできる状況にあることがよくわかる。

5. 4. コミュニケーションフレームの拡張

前節では非伝達動詞‘sit’における「コミュニケーションフレーム」の捉え方について見た。本節では非伝達動詞‘sit’以外の非言語コミュニケーションが関係する「コミュニケーションフレーム」についての考察を行う。

- (31) He had been unable to tell Ron and Hermione about his lesson with Dumbledore over breakfast for fear of being overheard, but he filled them in as they walked across the vegetable patch toward the greenhouses. (J. K. Rowling 2005: 313)
- (32) Sam would prefer to be alone over a cup of coffee at Starbucks. (COCA)
- (33) “They’re doing the wisest thing, you know. For if they were ever to go !” And he looked down at her over his cigar. (Henry 1904: 168)
- (34) (?)He looked down at her over his cigar.
- (35) Two days after Black’s break-in, she sent Neville the very worst thing a Hogwarts student could receive over breakfast – a Howler. (J. K. Rowling 1999: 302)

(31) では、伝達動詞の‘tell’が用いられているため「コミュニケーションフレーム」が存在するようと思われるが、動詞句に目を向けると、‘... unable to tell ...’となっているため、実際には会話は行われていないことが分かる。しかし、メッセージのやりとりが行われなかったことは、メッセージのやりとりを含む「コミュニケーションフレーム」の存在を否定するものではない。

(32) では伝達動詞は用いられていない。(31) と並行的に考えると、「一人でいることが好き」という状況の背景には、ことばが飛び交う賑やか、あるいは、騒々しい状況が想定され、そこに「コミュニケーションフレーム」が存在すると考えることができるのではないだろうか。あるいは一人での時間を過ごすことが、物思いにふけり自分と自分とのコミュニケーションを行うことが想定され、そこに「コミュニケーションフレーム」が存在すると考えることもできる。

(33) と (34) では動詞句として look down が用いられている。ただ「見おろす」という行為に「コミュニケーションフレーム」は無いため、(34) のように単文になると従事用法としての容認性は低くなるが、(33) のように文脈が与えられると「タバコを吸いながら」という従事用法の意味として容認される。(33) では動詞句 look down の前に he による発話があり、また、その会話後の「相手を見る」という行為は、相手に対して何か思うことが有ったり、まだ何か言いたいという気持ちを表す行為であると考えられる。そのためここでの動詞句 look down は「コミュニケーションフレーム」を持っていると考えることができる。そのため(32)は従事用法として容認しがたいのに対し、(33) は容認されるのである。

(35) は「朝食を食べながら」という従事用法として解釈が可能な文である。しかし動詞句に注目すると、ここでは伝達動詞は用いられていないため、言葉の移動による「コミュニケーションフレーム」は無いように思われる。しかし動詞 receive のフレームには「送り手」と「受け取り手」と「送られてくるもの」が参与者として含まれるため、送り手と受け取り手の間でモノの移動があることが表され、伝達動詞の持つイメージスキーマと並行的な関係にあると考えることができる。このモノはお祝いの品や手紙の場合のように何かのメッセージを運ぶ容器と捉えると、コミュニケーションフレームをもっていると捉えることができる。よってここでの動詞‘receive’は「コミュニケーションフレーム」を持っていると言える。そしてこの (35) のハリーポッターの世界では、食事中にフクロウなどの動物が荷物や手紙を届けにやってくることはよくあることである。そのため従事用法として容認されることになる。

このように、「コミュニケーションフレーム」とは典型的な言葉の移動によるコミュニケーションだけを表すのではなく、状況全体としてコミュニケーションを想起できる場合や、情報の移動によるコミュニケーションも表すことができることが分かった。

最後に、第 2 章で言及した従事用法の問題点の解決を試みる。

(36) We talked over (a cup of) coffee. (=前掲(3))

(37) ?We talked over (a glass of) water.

(=前掲(4))

ここでの問題点とは、なぜ「コーヒーを飲みながら(=36)」は容認され、「水を飲みながら(=37)」は容認されないのかが先行研究の分析では解決できないというものである。しかしこれは本論文での主張で解決できる。動詞の‘talk’は「コミュニケーションフレーム」を、overの目的語の‘coffee’と‘water’は「飲食・嗜好品フレーム」を持っている。そのためここで問題となるのは二つのフレームの合致である。例えばカフェでコーヒーを飲みながら話をする光景は容易に想像できる。しかしその飲み物が「水」では少し不自然である感じがする。すなわち (37) では「水を飲む」という行為と「話をする」という行為が一般的には習慣化されていないと考えられるため、従事用法として容認されないと考えられる。

5. 5. 従事用法として容認されない例

最後に従事用法として容認されない例を見ていく。

(38) ?I sang a song over coffee.

(39) ?I studied English over coffee.

(40) ?I watched a movie over coffee.

(41) (?)We watched a movie over coffee.

(42) ?I wrote a letter over coffee.

(43) ?I read a book over coffee.

それぞれの意味を考えると、(38) は「コーヒーを飲みながら歌を歌った」、(39) は「コーヒーを飲みながら英語の勉強をした」、(40) と (41) は「コーヒーを飲みながら映画を見た」、(42) は「コーヒーを飲みながら手紙を書いた」、(43) は「コーヒーを飲みながら本を読んだ」、という意味での従事用法容認度は低いようである。本論文での主張と照らし合わせると、これらで用いられている各動詞の内在的な意味フレームが、従事用法のプロトタイプの「コミュニケーションフレーム」、すなわち、「送り手」、「受け取り手」、「メッセ

ージ」を含むフレームと一致しない、という点が、従事用法としての容認度の低さの理由として考えられる。

6. まとめと今後の課題

本論文では英語前置詞 over の従事用法の容認性に関する考察を行った。従事用法の容認性には、動詞の「コミュニケーションフレーム」と over の目的語の「飲食・嗜好品フレーム」が、話し手や聞き手の文化や習慣の中で合致することが必須となることが分かった。また「コミュニケーションフレーム」には典型的なコミュニケーションである言葉の移動だけではなく、状況全体としてコミュニケーションが想起できる場合や、意図的な視線や情報の移動によるコミュニケーションも含まれることが分かった。

註

1. 本論文は平成 31 年 1 月に九州大学大学院人文科学府に提出した修士論文に修正・加筆を行ったものである。
2. 「くつろぎ」という表現は、日本英語学会第 36 回大会（2018 年 11 月 24 日-25 日）での西原俊明氏の研究発表「We talked over coffee. タイプ文の意味的・統語的特徴について」から援用したものである。
3. 引用元が記されていない例文は筆者が作成し、ネイティブチェックを受けた文である。自明のことであるが、例文の不適切さなどについては全て筆者の責任である。
4. 動詞 BUY は BUYER の GOODS に対する行為に焦点を当てており、その際には SELLER や MONEY は背景化されている。一方、SELL の場合は SELLER の GOODS に対する行為に焦点を当てており、その際には BUYER や MONEY は背景化されている。さらに、PAY の場合は MONEY と SELLER

に対する BUYER の行為に焦点を当てており、その際には GOODS は背景化されている。このように動詞の BUY、SELL、PAY は商取引のフレームという共通のフレーム要素を含むが、その中のどの要素に焦点を当てるかによって意味の違いを捉えることができる。

参考文献

- Brugman, Claudia. 1988. *The Story of Over: Polysemy, Semantics, and the Structure of the Lexicon*. New York & London: Garland Publishing, Inc.
- Dewell, Robert B. 1994. "Over Again: Image-Schema Transformations in Semantic Analysis." *Cognitive Linguistics* 5: 351-380.
- Fillmore, Charles. 1982. "Frame Semantics." *Linguistics in the Morning Calm*, 111-138. Seoul: Hanshin.
- Fillmore, Charles. 1985. "Frames and the Semantics of Understanding". *Quaderni Di Semantica* Vol. VI. no. 2. 222-254.
- Gibson, James. 1979. *The Ecological Approach to Visual Perception*. London: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers. (古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻訳. 1985. 「生態学的視覚論」サイエンス社)
- 本多啓. 2005. 「アフォーダンスの認知意味論」東京: 東京大学出版会.
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作・辻幸夫・西村義樹・坪井栄治郎・梅原大輔・大森文子・岡田禎之訳. 1993. 「認知意味論—言語から見た人間の心」紀伊国屋書店)
- 大堀壽夫. 2005. 「語彙記述におけるフレーム意味論」日本認知言語学会論文集 5: 617-620.
- Quirk Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman
- Radden and Dirven. 2007. *Cognitive English Grammar*. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

- Reddy, Michel. 1993. "The Conduit Metaphor: A Case of Frame Conflict in our Language"
Ortony: 164-201.
- Rosch, Eleanor. 1973. "Natural Categories". *Cognitive Psychology* 4: 328-350.
- Rosch, Eleanor. 1975. "Cognitive Representations of Semantic Categories". *Journal of Experimental Psychology: General* 104: 192-223.
- Tyler, Andrea and Vyvyan, Evans. 2003. *The Semantics of English Prepositions: Spatial scenes, Embodied Meaning and Cognition*. Cambridge: Cambridge University Press. (国
広哲弥 (監訳)・木村哲也 (翻訳). 2005. 「英語前置詞の意味論」研究社)

参考図書

- Conan Doyle. 1892. "The Boscombe Velley Mystery." *The Adventures of Sherlock Holmes*.
London: John Newnes.
- Conan Doyle. 1892. "The Read-Headed League". *The Adventures of Sherlock Holmes*. London:
John Newnes.
- Conan Doyle. 1901. *The Hound of the Baskervilles*. London: George Newnes
- Henry James. 1904. *The Golden Bowl*. New York: Scribner.
- J. K. Rowling. 1999. *Harry Potter and the Prisoner of the Azkaban*. London: Bloomsbury
Publisher.
- J. K. Rowling. 2000. *Harry Potter and the Goblet of Fire*. London: Bloomsbury Publishing.
- J. K. Rowling. 2003. *Harry Potter and the Order of the Phoenix*. London: Bloomsbury
Publishing.
- J. K. Rowling. 2005. *Harry Potter and the Half-Blood Prince*. London: Bloomsbury Publishing.

コーパス

Corpus of Contemporary American English: COCA